

プルーストの内的宇宙はいかに構築されるか？

―作中の嘘を手がかりとして―（その一）

佐々木 涼子

はじめに

マルセル・プルースト（1971—1922）の小説『失われた時を求めて』*A la Recherche du temps perdu*⁽¹⁾は、何よりもまず、作品がひとつの内的宇宙の表現に他ならないということを、それまでのいかなる小説作品にもまして強く打ち出したという点で、小説史上注目に価するものと言えよう。彼プルーストによれば、世界は人によって全く異なってみえるのであり、その質的な差は、ふつうは各個人の永遠の秘密として明かるみに出ないで終るものなのだが、いかなる直接的・意識的な方法によっても伝達不可能なこの質的な差を、画家の場合なら色彩、作家の場合なら文体だけが示すことができるのだと言う。

ただ芸術によつてのみ、われわれはわれわれの外に出て、見る人によつてはわれわれが見るのと同じでないこの宇宙を、他の人間がどのように見ているかを知ることができるのである。芸術というものがなければ、⁽²⁾ 其他人の宇宙は、そこでの風景も、月での風景と同じ程にも未知のものであつたらうものを。

もちろん、これは芸術一般に関する言葉であつて、従つて、古今すべての芸術作品にあてはまるものである。しかしこの考え方を、彼の作品『失われた時を求めて』のいくつかの特徴と重ね合わせて考えると、そこに彼の作品の独自性が浮かびあがってくる。

まず、さまざまに客観性をそなえた外的世界を描きながらも、その中心に、一切の客観的手がかりを捨て去つた純粹な自意識の「私」を据えることで、この作品における客観的事物は、その存在の根拠を根底において失い、逆に主観的なものとして現われざるを得なくなる。

しかも、そのように主観的、もしくは内観的な芸術創造の始まる一点へ向けた過程を、芸術作品そのものの内部の時間的軌跡と一致させたいいわゆる円環構造で、全体をひとつの大いなる瞬間へと還元せしめたことによつて、この小説は、一個の内的宇宙を、その最も基本的な本質において捉え、表現しようとしたものと言えるのである。

そこで、そのような作品の本質を捉えようとするすべての試みは、

そこに描かれている内的宇宙はどのように構築されているか？

あるいは

その内的宇宙はどのように構築されていくか？

という問いに集約されると見ることができであろう。逆の言い方をするならば、その問いに答えているのが、ほ

かならぬこの小説だということにもなるのである。とすれば、この鬱蒼と茂る森にも似て入り組んだ答を、少しでも明解な筋道の立つものにしなければなるまい。

ところでこのような考察には、いわゆるテーマ研究が、ある有効性を持っているように思われる。すなわち、作品の中にちりばめられ、埋もれているが、しかし作者の特性を色濃く示しているように思われるテーマを選び出し、それを考察の対象とするのである。こうすることによって、混沌そのものの宇宙が、ひとつの観点のもとに整理され得る。ちやうど人体にレントゲン光線を当てた程に、あるいは一国語に文法をあてはめる程に、その内的秩序のあきらかなものになるのではあるまいか。

ジョルジュ・プーレ⁽³⁾は、『批評意識』の中で、プルーストにとって、批評するとはすなわち^{テーマイック}テーマ研究であったと述べているが、プルースト精神において重要なこの思考方法は、われわれがプルーストの作品を扱う場合にもまた有効であると言えるだろう。

もちろん、この方法にも欠陥がないわけではない。まず、はじめに選んだテーマが、作品全体において占める重要性が、きわめて小さなものであった場合、われわれがその分析を通じて得ることができるものもまた限りがあるだろう。また、テーマが作品の中核を指し示すものであったときにも、それによって得ることのできた理解は、たとえば生ける人体とレントゲン写真が異なっている程にも、作品そのものとかげはなれていることを忘れてはなるまい。要は、ひとつのテーマについて考察を進める際に、そのもととなる作品全体を常に視野から失わないようにすること。そうした上で、幾つものテーマ研究を重ねていくならば、森の中に道を失い茫然自失した、あるいは幻惑された読者としてではなく、納得つつ理解を深める分析者として、再び作品の全貌を把むことができるのではあるまいか。

以上の見地から、本稿においては『失われた時を求めて』の中に出てくる嘘を対象に考察を進め、作品の本質に近づき、冒頭において述べた仮設をあとづけてみようと考えてみる。

まず第一章において、嘘というテーマの検討、加えて考察の対象である作中の嘘を確認する。

次いで第二章では、個々の嘘を検討しつつ、それらに共通している特徴を明きらかにしよう。

最後に第三章で、プルースト精神において嘘とは一体何であったかを述べ、それが作品全体の内部法則とどのように関わり、作品をどのように解明しているか見るつもりである。

第一章

『失われた時を求めて』には、登場人物の嘘が問題になっている箇所が数多い。この嘘という事柄は一見優れてプルースト的なものに思われるのであるが、それはなにゆえか考えてみるに、おそらく、人間心理の面できわめて興味深い展開を示し得る題材だからではないだろうか。周知のように、プルーストは人間心理に関して他に類を見ない程に精緻な眼を持つ作家である。その細やかさは、彼の作品が世に出た当初、その評価において世人の眼を欺いたほどのものであって、その意味では、むしろ彼にとって禍いをなすものであったとすら言えるだろう。しかし、この作家が、それ以前の小説にとって未踏の地を切り拓くことになったのも、考えてみれば自らの心に深く探りを入れ、いわばその基底に触れたのちのことであったのだから、その点での評価も不当なものであってはならないはずだ。従って、人間の内面と外面の境目にはめこまれた歪んだレンズとも言うべきこの嘘という現象に、プルーストが深い関心を寄せているのも十分に理解できることである。

プルーストの作中人物たちはしばしば嘘をつく。もつともこれは彼らに限ったことではない。人間だれにも共通する所業である。『失われた時を求めて』の中ではそのようなとき、作者は決してその好機を徒らに見送ることなく、人間の内面生活、あるいは人間関係について自らの考えを展開させるのである。

殊に、それらの嘘の中には、細かい観察をもとにして、さまざまに観点を異にした解釈を積み重ね、めぐる歳月を通じて次第に変化する様相なども浮彫りにした結果、ひとつの嘘あるいは同一人物の同一種類の嘘のグループをめぐる考察が、おのおの独立した小説にも匹敵する大きさと重みを持つに至ったものが幾つかある。

本稿においては、それらのいわば大きな嘘を主たる考察の対象にしたいと考えている。そこで、それらを作品の中にあとづけてみることにしよう。

まずルグランドの嘘が挙げられよう。ルグランドはコンブレで「私」の家族と隣人としての付き合いがあったが、気にさわる行動によって家族の心を乱し、貴族の社会に野心を抱くスノップと断定される。その後はスノップとしての言動のみが描かれているが、彼は決して自ら社交界に憧れていることを告白しないばかりか、スノビズムを激しく糾弾してやまないため、その言葉は終始いつわりの色を帯びることになる。⁽⁵⁾

次に挙げられるのは、『スワンの恋』の中のスワンの恋人オデット・ド・クレシの嘘。オデットと付き合いようになつたスワンは、はじめのうち、自分と一緒にいないときのオデットの行動について全く無関心でいたのだが、やがて恋が深まるにつれて、ふとしたことから自分と離れているときのオデット、自分にとって未知のその生活が気になるようになる。そして彼女の言動のそこかしこに嘘の匂いをかぎとるようになるのだが、とりとめなく散乱するそうした疑いは、ある日、いつもになく日中前触れなしに訪れたスワンに対して、オデットが長い間戸を開けさせなかった事件をきっかけに、スワンの内に大きな結晶を結ぶにいたつた。そして、そのとき受けた精神的な打撃と、裏にひ

そも真実を知りたいという欲求が、結局生涯にわたってスワンをオデットにつなぎとめることになる。⁽⁶⁾

もうひとつの例はシャルリュス男爵に見ることができよう。『花咲く乙女たちの蔭に』で、第一回目のバルベック滞在の折に、シャルリュスは「私」の前に出現するのであるが、そのときのきわめて不可解な印象は、その後のシャルリュス氏の謎めいた言葉、説明不可能の嘘などに引きつがれ、『ソドムとゴモラ』において、彼の同性愛という秘密が明かるみに出てすべてを説明するに至るまで、いわばシャルリュス氏それ自体をひとつの大きな謎として設定することになる。⁽⁷⁾

最後に、この作品の中で最も大きく、そして「私」にとって最も重要な意味を持つ——少くとも文学へ向けての最終的な決断の踏み台になったに違いないと思われる——嘘は、アルベルチーヌに見ることができよう。

出合いの当初から、彼女のなかに感じられる未知の部分、未知の生活が、常に「私」をアルベルチーヌに惹きつけてきたのだが、その彼をパリでの同棲に踏み切らせたのは、彼女の同性愛の疑いであった。それ以後の「私」は、彼女の嘘を見破ることに情熱を傾け、アルベルチーヌは、その追求の矛先をかわそうとしつつ、この恋愛は、いわば前提条件としての彼女の嘘をめぐる対峙する二人の関係として持続することになる。ところがアルベルチーヌの突然の失踪と死によってその関係がくずれると、彼女の嘘をめぐる闘いは彼ひとりの内面に場所を移し、「私」は疑いが疑いと呼んで慰められることがないという底なしの沼に落ちていくのである。⁽⁸⁾

これらの嘘は、いずれも作品の中でかなりの頁数をさいて語られ、各々が個有の筋立てを持っているものではあるが、しかもどれも『失われた時を求めて』という作品の中の非常に重要な部分を占めていて、この小説全体の重みを支える太い柱の一本となっていて思うられる。そればかりか、それらの嘘をめぐる思考の中に、プルーストという作家の個性をきわめて強く主張するものがあるようにも感じられるのである。従って次のような問題は問うて

みるだけの価値がおおいにあるのではあるまいか。つまり、『失われた時を求めて』の中の嘘は、いかなる特徴を持ち、プルーストの思考の歩みにおいていかなる機能を果たしているか。そしてその内的宇宙の構築といかなる関わりを持っているか、ということ。

ここで改めて確認しておきたいのは、本稿において、問題の焦点は嘘という現象にのみしぼられるのではなく、それを通して、この小説作品をその本質において捉えるということである。作品の本質という点に関しては、もちろん、今までにも多くのことが述べられてきたし、それ以前に『失われた時を求めて』の本文の中にも、作者自身の見解を読むことができる。しかし、そのような理論的、抽象的議論とは別に、あるいはそれと重なり合うものとして、この作家の独創性を、嘘のエピソードの中により具体的なものとして探ることができるのではないだろうか。

今日までに世に出た幾多のプルースト研究の中にも、嘘の問題を取り扱ったものがないわけではない。⁽⁹⁾しかしそれらは殆どすべてが、嘘を恋愛の問題に属するものとしてのみ見ているように思われる。プルーストの恋愛においては嫉妬が中心的な役割を演ずるものとされていて、嘘はその表現ということになるのである。例えばジル・ドゥルーズは『プルーストと記号^{シニユ}』の中で、次のように言っている。

恋愛の第一の法則は主観的なものである。主観的には嫉妬は愛よりもっと深いのであって、愛の真実を含んでいる。それは、嫉妬が、記号を捉え解釈することにおいてより遠くまで行くことである。嫉妬は愛の使命であり宿命である。実際、愛されている者から発する記号は、われわれがそれを△説明▽するやいなや、嘘めいたものとなるのである。その記号はわれわれに向けられ、われわれにあてはめられてはいるのだが、しかし、われわれが締め出されている世界、われわれの愛する者の方でも、われわれに知らせることができもしなければ、またそう望みもしない世界を表現しているのだ。⁽¹⁰⁾

これはプールの嘘の、まことに優れた定義である。しかしながら、ここではまだ視野は恋愛に限られていて、嘘そのものを分析の直接の対象にしているわけではない。

さて、いよいよ本題に入るわけであるが、その前に、嘘という語について少し考えてみるのも無駄ではあるまい。本稿において嘘は、フランス語の *mensonge* に対応するものとして考えられているが、この語にもある種の曖昧さがつきまとう。一般に、嘘は真実と対立関係にあるものと考えられるが、真実に違えば常に嘘というわけでもない。暗々裡に相手を欺こうとする意図も含まれるのがふつうである。また、おおそ真実に従って言われた言葉も、それが標榜するのと別の意図を隠し持っているような場合——たとえば、純粹に相手のためを思うと見せかけた忠告に、実はそれを言う人の利害がからんでいるようなとき——、それをいつわりのものとする感じ方もある。つまり、ある言葉を嘘と感ずるか否かは、その言葉を受けとる側の精神状態にかかるところが大きいのだ。また、「嘘いつわりの人生」などと言うときには、問題は現実に言われた言葉の真偽ではなく、別の観点からの判断が含まれたりもするのである。どうも嘘という言葉においては、それと判断する側の主観的な要因が大きく作用するようだ。だが、こうしたことは、次の章において細かく考えることにしよう。

第二章

『失われた時を求めて』に出てくる嘘と、嘘に対したときの「私」の態度を仔細に検討すると、そこに、幾つかの共通した特徴のあることに気がつく。

道義的な観点の欠如、そして他人の内面

まず第一は、「私」が嘘について考えるときの観点が、決して道義的なものではないということである。言葉を変えると、プルーストの嘘は、道義的な枠組を持たないものとしてあらわれる、ということになるだろうか。

一般的に、嘘はそれ自体悪いもの、悪徳のひとつであるとする考え方があがあるが、そういう見方の基盤となっているのは、超越的な神のイメージであつたり、あるいはより漠然としたかたちでの倫理感であると言えよう。そのような道義に基づく価値基準を持つて嘘を見るとときには、嘘は、事実に反するという点のみが重要視されて、その嘘の背後にかくされているものを理解しようとする努力が、幾分か勢いをそがれることになる。つまり、嘘は嘘であるが故に悪いとなれば、そう断定することで、他人の嘘をある程度つき放すことになるのである。

ところで、プルーストの場合宗教的なものに対する一種審美的な感受性があつて、それが彼のものの考え方に影響していることは否めない。カトリックの伝統、その建築、祭礼に対して、彼一流の愛着を示すのは『失われた時』の随所にうかがわれる通りである。しかしながら、価値の選択に関して判断のよりどころとなるという意味においては、プルーストは全く信仰を持たない人であつた。彼に何らかの意味での信条といったものを求めるとすれば、芸術に対するそれだと言えるかもしれないが、しかしこの芸術は、彼によれば、道徳なども含めた一切の習慣的なものの見方を捨て去ることを要求するものである。

……われわれの自己愛や情念や模倣精神、抽象的な知性とか習慣などがでっちあげたこと、それを芸術はうちこわすことになるだろう。芸術によってわれわれが辿るのは、それとは逆の方向、つまり深みへと(……)もどることなのである。⁽¹¹⁾

プルーストの嘘は、それ自体への価値付けという枠組みを持たない。強いて言うとすれば、すぐ見破られる嘘をつ

くのは頭が悪いというほどのことである。

このように、嘘そのものに対して道義的基準を持つとしないということは、この小説の中の嘘がほとんど「私」に対して言われたものであることとあわせて考えると、きわめて興味深いことと言わねばなるまい。

こうして、プルーストの嘘は、単にそれが隠している、あるいは暗示している真実との関わりにおいてのみ意味を持ちうるものとして、「私」の前にあらわれる。そして、このような嘘の意味を把むためには、まず、嘘についている当人の意識的・無意識的意図を知ろうとするのが自然である。

ところが、自ら判断の基準としての道義性を持たないプルーストは、他方において自分以外の他人の内面を信頼することのできない人間でもある。われわれが他人について抱くイメージは全く恣意的なもので、その実体と遠くかけはなれていること、他人は△その資質や欠点、計画、われわれに対する意図などを備えた明確でゆるぎないものとしてわれわれの前にあるのではない。それは言うならば影のようなもので、われわれはその中に入りこむことなどとうていできず、直接的な認識もないために、言葉や行動をたよりにいくつもの信念をこしらえあげるのだが、その言葉や行動といったものは、どちらも不十分な知識しか与えてくれず、しかもそれすら互いに矛盾したものなのだ⁽¹²⁾、ということを、「私」は『スワン家の方へ』の冒頭から繰り返し語りつづける。

例えばシャルリュスの嘘のときにも、ある種の言葉の本当の意味を知ろうとして、その言葉を口にした当人を問いつめても、結局は何も分らずじまいだということを、「私」は思い知るのである。

……私に分ったことと言えば、ある人の意図について本当のことを知ろうとしてその人に訊ねてみても駄目だということ、それに、誤解だということにして、恐らくは気づかれないままに終らせてしまう方が、馬鹿正直に相手にくいさがるより危険が⁽¹³⁾少ない、ということであった。

嘘を前にしているときの「私」は、ひとつの謎を前にしているのと同じであって、自らの洞察力のみを頼りにこの謎を解いていかなくはならないのである。

嘘と真実

このように、「私」はいわば素手で嘘そのものと向き合うことになるのであるが、その嘘というのが、そうたやすく捉えられるようなものではない。

ここで、われわれはプルーストの嘘に関して、注目すべき第二の点に移ることになる。

それは、これらの嘘は、厳密な意味においては、真実と対立した関係にある嘘とは言えないということである。一般的に考えたとき、嘘というものは、確固たる真実があつて、それに反するという意味においてはじめて成立するもののように思われる。その場合、真実は、嘘を想定するにあたつて必要不可欠の基盤となつていているわけだ。ところが『失われた時』に出てくる嘘には、しばしばこの支えとしての真実が欠如しているのである。

その最も顕著な例は、恋愛における嘘に見ることができよう。ここでは、嘘を想定させるものは、何よりもまず、愛する人を完全に自分のものと感ずることができないが故に生ずる苦痛、切ない好奇心である。だからこそ、

……彼女（オデット）が嘘をついていると彼（スワン）が感じるためには、それに先立つて疑いを持つていふことが必要条件であつた。しかもそれが十分条件でもあつたのである。そのようなとき、オデットが言うことはすべてスワンにはうたがわしく思われるのであつた。誰かの名前をきけば、多分彼女の愛人のひとりだろうと思ふのである。⁽¹⁴⁾

アルベルチーヌとの恋愛における「私」は、このようなスワンの体験をさらに進めて、彼女をまるで嘘の化身であ

るかのように感じ、思いまどう。そして、嘘は恋愛においてもはや避けることのできないものだとは結論するに至るのである。

……嫉妬していることが見破られると、それだけで、愛情の対象になっている女には、それが相手を欺くことを容認する挑発のようにとられてしまうのである。もっとも、何かを知ろうとする挙句、先に嘘をつき、欺くことになるのはこちらの方なのだ。⁽¹⁵⁾

このような場合には、嘘は、真実や現実の踏み台を全く借りずに、はじめから嘘だけで出現している。

しかし、嘘をめぐる彷徨する際に、一方に明白な事実があつて、それが思考の歩みを助けてくれるように思われる場合でも、ことはなかなか簡単に決着を見ない。というのは人間の記憶力や理解力も、疑いをはさむ余地もない程に確かであることは決してないからである。バルベックでシャルリュスの招きに応じてヴィルパリジ夫人を訪ねた「私」が、この訪問を全く予期していなかったふうに振舞うシャルリュスの不可解な応対を受けて直面するのは、まさしくこの問題である。

……彼（シャルリュス）が一切の説明を拒否するので、私は自分で説明を見つけようとしてみた。だが幾つもの説明の間で迷うばかりで、しかもどれひとつ正しいようには思えなかった。その朝私に言ったことを、ひよつとすると彼は思い出さなかったのかもしれないし、あるいは私の方が誤解したのかもしれない……⁽¹⁶⁾

記憶力まで疑わしいとなると、嘘に関する探求はまさに迷宮入りである。

……あとでひとりきりになったときに、われわれはもう一度その言葉について考えてみる。どうも現実とぴたり合っているようには思えない。だがその言葉を、われわれはしっかり思い出しているだろうか？ その言葉について、またこちらの記憶力の確かさについて、自然に疑いが生まれてくるようだ。それはちょうど、神経のまいった状態にあるときに、ちゃんと鍵をかけたかどうか、どうしても思い出せず、五十回確かめてもまだ初めと同じように納得がいかない、そんな人達につきまとう疑いと同じ種類の疑いである。はつきり思い出せばほっとするであろうが、それができないとなれば、その行為を無限に繰り返すこともできなくはない。少くとも五十一回目に戸を閉め直すことはできるのだ。それにひきかえ、言葉は過去のものである。それを耳にしたというのも不確かで、しかも、もう一度再現したいと思っても、われわれにはどうすることもできないのだ。⁽¹⁷⁾

アルベルチーナの死後になってもまだ、この娘の嘘の証拠を探し出そうとやっきになる「私」についても同じである。そして、とうとうその証拠を手に入れると、今度はその証拠が正しいかどうか疑わしくなるのである。アルベルチーナが女友達と一緒に行ったシャワーの番をしていた女から、エメが何かを聞き込んでくる。すると……

……そのシャワー係の女がエメに話したことにとれ程の意味があるというのだ？ まして彼女は何も見ただけではないのだから。友達とシャワーを浴びに来たからと言って、別に何もやましいことは考えていなかったこともありうるのだ。多分、我慢したくて、そのシャワー係の女はチップの額をおおげさに言ったのだらう。⁽¹⁸⁾

そして「私」は、想像力を働かせて死んだはずのアルベルチーナを生き返らせ、今度はエメの誠実さまで疑うのである。

……アルベルチーナが生きていたとしたらそうしたであろうように、私は彼女に、洗濯女の話（もうひとつ別の証言）は本当

かとやさしく訊ねた。彼女は、違うと誓った。エメの言うことは本当ではない、エメは、私が与えた金に値することをやったように見せたくて、手ぶらで帰りたくなかったから、洗濯女に良いように言わせたのだと。⁽¹⁹⁾

アルベルチーヌと「私」の共通の友人のアンドレが亡き親友の悪徳について明かしてくれたときに、「私」が考えるのもそれと同じことである。

……だが、アンドレがもはやアルベルチーヌの存在を信じていないということは、結果として、（明かさないと約束した真実をもらすことを恐れなくなったと同様に）嘘を捏造してアルベルチーヌを共犯者に仕立てあげ、彼女を中傷することをも恐れなくなったということでもあった。こうした恐れがなくなったために、アンドレは、彼女がもし私のことを幸せいっぱいで傲っていると感じて苦しめてやりたいと思ったとすれば、アルベルチーヌのことで、真実を告げるとか、あるいは嘘をつくとかすることができるようになったわけである。⁽²⁰⁾

そして、遂には「私」はこう思うのである。

……それにしても、嘘をついているのがなぜアンドレでなくアルベルチーヌだと考えなくてはいけないのだろうか？

……
真実も人生も実にごみ入っている。それらを知ることが結局できないで、私に残されたものは、悲しみに打ち勝つのは恐らく⁽²¹⁾
疲れたという印象であった。

このようにプルーストの嘘は、しばしば真実と関りのないものとして現われる。というよりは、はじめのうち、思

考の出発点として意識のスクリーンに真実のイメージが映っていたとしても、嘘そのものに注意を凝らしていくうちに、いつか真実の影がしだいに薄らぎ始めて、最後に残るのはただ嘘の無限に揺れ動くイメージだけという結果になつていくのである。

『失われた時』に出てくる嘘のうち、幾つかは、このように、それを追求するものを一種のめまいに似た状態にひきずり込んだ挙句、遂に解明されることなく空中分解してしまうのである。

スワンは、昼間前触れなしに訪れたあの日、オデットが本当は何をしていたのか、それを知りたいという願望をオデットに対する感情の核として彼女との生活を続けながら、結局それについての真実を得ることがないままに終る。

またアルベルチヌの嘘についても、「私」は一体どのような確証を得ることができただろうか？ 読者としては、「私」が幾つもの可能な仮設の間を行きつもどりつし、いつの間にか平静をとりもどして、ヴェニスに旅立つ直前になって、△人生において真実を知るのは何と難しいのだろう▽と、⁽²²⁾ 呟くのを見るだけで、結局納得のいく説明は与えられていないのである。

真実はどこにも見当らない。それはあたかも、「私」自身がそう望んでいるかのようにすらある。と言うのも、彼は手にする証拠は片端から疑ってかかるのであるから。だがまた、どこにもない真実は、全く思いがけないところに潜んでもいるのであって、はじめのうち明らかに嘘と見たものそれ自体が、いつの間にか真実に変ってしまったりもするのである。例えば、「私」は実らずに終った恋を少しずつ忘れていく過程で、△嘘で言っていたことがすべて⁽²³⁾ 少しずつ本当になり、(……) 涙のかわく間もなかった頃、うわべだけ装っていた冷淡さが、とうとうその通りになる▽という経験をする。

またルグランダン⁽²⁴⁾は「私」に向かって、△貴族と交って、君の魂の良き素質をないがしろにするようなこと▽をし

てはいけないうと、勧告し続けるのであるが、この言葉は「私」の耳には虚偽に満ちたものとしか響かない。と言うのも、ルグランドン自身、社交界の門をくぐろうと裏で必死に努力しつつしかも報いられずにいることを知っているからだ。しかしルグランドンの言うことが、これまた社交界の魅力にとりつかれているその時の「私」にはまけおしみとしか思えなくても、結局は芸術の孤独の中に閉じこもることになる「私」にとって、実は最も当を得た、それ故に語るルグランドンの意図をも越えて真実な忠告でもあったとは言えまいか。

こうして嘘はあるとき真実と溶け合ったり、あるいは真実に変質してしまうこともあるのである。もうひとつルグランドンの例を見てみよう。ルグランドンがスノップであるとの確信を抱き、⁽²⁵⁾ルグランドンが、自分は教会と月と光と青春しか愛さないうと言ったとき、彼は全く正直であつたとは言えない⁽²⁵⁾と述べたあとで、しかし「私」はこう付け加えている。

だが確かに、それだからと言ってルグランドン氏がスノップどもに憤りの声をあげているとき、彼が正直でなかつたというわけでもなかつた。彼は、少くとも自らは、自分がスノップだということを知らないのであつた。(……)ルグランドンのスノビズムは、決してどこかの公爵夫人にせつせと会いに行くようそのかしているのではなかつた。それはまず、ルグランドンの想像力に訴えて、この公爵夫人があらゆる優雅さに飾られた人だと彼に思い込ませるのである。そこで彼は、自分分けがらわしいスノップどもの与り知らぬ精神と美徳の魅力に負けたのだと信じつつ彼女に近づいていくのであつた。⁽²⁶⁾

嘘はどこにあるのだろうか。そして真実はどこにあるのだろうか。プルーストの精神は、あたかも真実が単なる真実であること、あるいは嘘が単なる嘘であることを拒否しているかの如くである。そしておそらくはその通りなのだろう。

このようにして『失われた時』の嘘は、次第に嘘としての性格が曖昧なものになり、主人公の「私」と読者であるわれわれとを五里霧中の混沌にひきずり込んでいく。そして、この混沌から抜け出すためには、第三の要素を借りる以外にないのである。

未知なる世界

ここで浮かびあがるのが、プルーストの嘘に見られる第三の特徴である。それは、『失われた時を求めて』に登場する嘘が、何らかの意味で、「私」にとって新しい経験、未知の世界の開示と深いつながりを持っているということである。

「私」がはじめてルグランダンの不可解な態度に接した時期は、ちょうどこの少年の中に貴族社会に対する関心が高まってきた時期でもあった。その意味で、△ミサの帰りに、私たちはよくルグランダン氏に出会ったものであった。⁽²⁷⁾ という一見なんでもない文章は、「私」の内なる出来事と外なる出来事を重ね合わせることで、その時期の「私」の最大関心事を両面から照らし出し浮き彫りにしている、きわめて必然性の高いものであると言わねばならない。

コンブレの教会は「私」にとって、物質化された過去そのものとも言うべきもので、その内部で、エステル結婚を表した古いタピスリーを眺めては、古きフランスとその継承者であるゲルマント一族のことを夢みるのだが、このタピスリーは、△言い伝えによると、アシユレウスはあるフランス王の面立ちに、そしてエステルはこの王が恋していたというゲルマント家のある貴婦人の面立ちに似せてあるということであった。⁽²⁸⁾ そして、教会内部の薄暗がりから出て外の陽光にさらされるように、薄暗い夢想から抜け出した「私」はルグランダンに会うのである。ルグラン

ダンの中にさまざまな心理的屈折、嘘を読みとる心の働きは、そのまま貴族という未知の世界への接近の第一歩であったと言ふことができるであろう。

シャルリュスの場合も、その小さな嘘のひとつひとつのみならず彼の示す態度の不可解さは、その全てが、ソドムスという一本の大河へ流れ込む無数の支流のようなものである。そしてシャルリュスの同性愛が「私」の眼に明らかなものとなったとき、はじめてシャルリュスの全人格が理解可能になるのである。

……今や、抽象的であつたものが具体的なものとなった。遂に理解されるようになったその存在は、たちまちそれまでの他人の眼にとまらずにいる能力を失つてしまった。そしてシャルリュス氏の新しい人間への変化はとても完璧なものであつたために、彼の顔や彼の声のコントラストばかりでなく、時間をさかのぼって私と彼の関係の起伏や、それまで私にはどう考えてみても辻褄が合わないように思われた一切のことが、理解できるものとなり当然のことと見えるようになったのである。⁽²⁹⁾

そして、こののち、シャルリュスが語ることはすべて、真実と嘘の二つの面を同時に持つようになる。と言ふのも、自らの性癖をひたかくしに隠しながらも、この饒舌な審美家は、一見無関係な事柄にことよせては、内なる情念を語らずにいられないからで、その嘘と真実をふたつながら認めることができるのは、一段高い観点に立っている「私」だけということになるのである。

その高い観点に、「私」は、一見まとまりなく散乱する印象や体験を自らの内部に積み上げた後に、あたかも天から降ってきたかと思われるような突然のひらめき、啓示を得て到達することができたのであるが、それによつて、その後は、ひとつの事柄を同時に表と裏から見ることができるようになる。言い変えるならば、それと知られずに他人の内面にもすべり込むことのできるかくれみの、手を手に入れたことになるのであつて、これはちょうど、遂に理解さ

れるようになった人間が、それまでの他人の眼にとまらずにいる能力を失う現象と對をなすものと考えることができらう。従つて、シャルリュス氏の変質は、その結果として、「私」という意識の逆方向への変質を惹き起こすことになるのだが、それについては後に詳しくふれることにしよう。

プルーストにおける恋愛の場合、嘘は愛する相手の本当の生活をかいま見させることになるのだが、この生活こそは、愛するが故に決して入ることを許されない未知なる世界であつて、恋愛において最大の好奇心を、そして苦悩をかきたてるものである。だが、この点に関しては、先にもふれたように、如何なる探求も空しく終るのが常である。つまり、恋する者は決して恋人の眞の生活を知ることがないのである。

ところで恋愛には、嘘と関係がありそうなもうひとつ別の問題が考えられる。この問題は少々捉え難いところがあるけれども、しかしまた、われわれを遠くへ導いてくれるかもしれない。それは恋愛における眞理・眞実とは何かということである。事実、ひとが恋愛体験を通じて得ることのできるものは、直接的、具体的な眞理あるいは知識というかたちをとらないために、きわめて曖昧なものであつて、それに関する考えは、人によって千差万別であるに違いない。しかし今ここで問題になっているのは、一般論としての恋愛ではなく、プルースト個人の恋愛観である。そのプルーストは恋愛について次のように言う。

……これらの予測もつかない状況は、われわれをして、否応なしに自分自身とより深く接するようさせるものである。恋愛がわれわれに示すこれらの悩みにみちたデレンマによつて、われわれは、自分がどういふ人間であるか、次々に発見することになるのだ。(……) 私に時間を遣わせ、私に悲しみを与えながらも、アルベルチヌは、文学的な観点からしてさえも、私の原稿を整理してくる秘書より役に立ったに違いない。⁽³⁰⁾

ここで注意しなければならないのは、愛が他人との関係なのでなく、自分自身との関係だということである。プルーストによれば、愛は、閉ざされた壺にも似て孤独な人間の宿命を、より深く認識させるものである。われわれ人間がどれ程ひとりきりの存在であるか、最も密接な人間関係と目される恋愛においてさえ、ひとりひとりがどれ程遠いものであるか、この作家はわれわれに教えている。心の底では、友情というものに殆ど信を置いていない彼⁽³¹⁾としてみれば尚のこと苦渋にみちた認識であったはずである。愛し合う試みの果てに、ひとは、他人と結ばれ、他人のために、そして他人によって生きる可能性を最終的に失う。そしてそのときはじめて、自らの内に深く降りて行って、そこに、自らの深みの中に真の人生を見出す決意を固めるのである。その真の人生とは、プルーストの場合、文学に他ならない。つまり、恋愛の嘘が予感として持っている未知の世界は、孤絶した自我と、それに続く百八十度の大逆転の後の至高の真実、芸術そのものであったと言えるのである。

スワンの恋の場合には、「私」の場合と異なつて、恋愛が至高の領域、つまり芸術創造への踏み台になることができなかった。それは、スワンが自分の恋を最後まで追求せずに終ったからに他ならない。スワンは自分が足をとられた底なし沼の意味を見極めることなく、いわばその表面に浮上したままで、一生をオデットのそばで、そして芸術的にはアマチュアとして過ごすことになる。その差を決定的なものにしたのは、言ってみれば、スワンと「私」の嘘に対する態度の違い、つまり、スワンはオデットの行為の真実を最後までつきとめようとせず、その結果、彼女の嘘を完全に自分自身の問題として捉えることがなかったためなのである。

このように、『失われた時を求めて』において、嘘はいずれの場合も新しい経験、未知の世界が開示されることと深いつながりを持っていると見るができる。そして、ひとたび全く新しい視野がひらけ、これまでとは異なる観

点が得られると、嘘は再びその観点から見直されることになる。そのとき嘘は、出発点においてそうであったのとは全く別のもの、嘘であると同時に、もうひとつ別の真理を體現したものとしてみえるようになるのである。

われわれが気づかずにいた深い現実のこちら側には嘘や間違いがあり、向う側に真実がある、われわれにはその根本原則が捉え難く、時間を経なければ明らかなものにならないわれわれの性格の真実、そしてわれわれの運命の真実⁽³²⁾も。

(以下次号)

註

(1) 『失われた時を求めて』 *A la Recherche du Temps Perdu* Ed. Pierre Clarac et André Ferré, 3 vols, Bibliothèque de la Pléiade, 1954. 以下の註において、「」内に示されるのは各巻の表題、I, II, IIIとあるのは、上記プレイアド版の巻数、続く算用数字はその頁数である。

(2) 「見出された時」 III, 895

(3) Georges Poulet, *La Conscience critique*, José Corti, 1974, p. 49—55

(4) III, 1041……「私が大いなる法則を探しているところで、人は私を重箱の隅をほじくっている」と言った。》

(5) ルグランダンの嘘について語られている箇所は、I, 119—121, 124—132, 384, II, 153—154, 200—204

(6) オデットの嘘について述べられている箇所は、I, 239—240, 272—275, 277—281, II, 524

(7) シャルリュスの嘘について述べられている箇所は、I, 751, 759—760, 767, II, 285—296, 552—568, 601—614, 990

(8) アルベルチヌスの嘘について述べられている箇所は、I, 794, II, 795—797, 798832, , 851, 1097, 1114, III, 98—104, 145, 178—182, 189—192

(9) ジェラルル・ジュネットは、『プルーストと間接的言語』において、『失われた時』の登場人物の語る言葉を分析し、嘘の問題を言語の問題として考察している。《啓示的な語は、本質的に嘘である言葉を土台としてしかありえない。言葉の

真実はひとつの征服の目標であるが、その征服は必然的に嘘の体験を経るものである。つまり言葉の真実は嘘のなかにあるのだ。》

(Gerard Genette *Figure* II, Ed. du Seuil, 1969, p. 249)

《……真実は言表において「字面よづらの通りに」表現されると考える「純真さ」は、常に、いたるところで執拗に嘘や、不誠実や無意識を経験することで、空しいものとされてしまう。それらの経験においては、言葉が内的な「真実」に対して最大に「誠実な」ものであったとしても、その言葉は中心をはずれたものであるということや、言語は、この内的「真実」を示すのには無能で、かすめとるとか、的をはずすとか、仮装するとか、いずれにしても間接的で二義的な方法によるしかないということが、明白に表われているのである。》(同、p. 293)

- (10) Gilles Deleuze, *Proust et les signes*, Presse Universitaire de France, 1970, p. 14
- (11) 「見出された時」Ⅲ, 896
- (12) 「ゲルマントの方」Ⅱ, 67
- (13) 「花咲く乙女達の蔭で」Ⅰ, 760
- (14) 「スワン家の方へ」Ⅰ, 297
- (15) 「囚われの女」Ⅲ, 61
- (16) 「花咲く乙女達の蔭で」Ⅰ, 760
- (17) 「囚われの女」Ⅲ, 61
- (18) 「逃げ去る女」Ⅲ, 520
- (19) 「逃げ去る女」Ⅲ, 530
- (20) 「逃げ去る女」Ⅲ, 603
- (21) 「逃げ去る女」Ⅲ, 623
- (22) 「逃げ去る女」Ⅲ, 620
- (23) 「逃げ去る女」Ⅲ, 461
- (24) 「ゲルマントの方」Ⅱ, 154
- (25) 「スワン家の方へ」Ⅰ, 128

- (26) 「スワン家の方へ」Ⅰ, 129
- (27) 「スワン家の方へ」Ⅰ, 67
- (28) 「スワン家の方へ」Ⅰ, 60, 61
- (29) 「ソドムとゴモラ」Ⅱ, 614
- (30) 「見出された時」Ⅲ, 309
- (31) cf. ♪……(友情は)実にとるに足りないものであって、何らかの天才を持っていた人々、例えばニーチェという人が、これに何かしら知的な価値を与えたり、その結果、知的に評価しえない友情を自ら拒んだりする程の純真さを持っていたということが、殆ど信じられない位である。▼(「ゲルマントの方」Ⅱ, 394
- (32) 「逃げ去る女」Ⅲ, 507)